右下顎枝部にみられた粘液線維腫の1例

西嶋克巳・長島駿一郎・岡本全允・前田健一郎
小林清司・松村和良・永峰 昇・上田茂樹

A case of myxofibroma in the area of the right mandible ramus

Katsumi NISHIJIMA・Shunichiro NAGAHATA・Yoshimitsu OKAMOTO・Kenichiro MAEDA
Seishi KOBAYASHI・Kazuyoshi MATSUMURA・Noboru NAGAMINE・Shigeki UEDA

緒 言

粘液線維腫は、口腔領域において比較的まれな腫瘍であり、ほとんどが顎骨に発生し顎骨中心性のものと口腔粘膜、歯槽部などの辺縁性のものとに大別されている。最近われわれは34歳女性の右下顎枝部に発生した部位的にきわめてまれと思われる粘液線維腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：[redacted] 34歳 女性。

初 診：昭和51年9月[redacted]日。

主 訴：右頬部の異和感。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：約1か月前、6のう蝕治療のため某歯科受診の際、右下顎枝部の異常を指摘され当科受診。

現 症

全身所見：体格、栄養ともに中等度であり、全身的には特に異常所見はみられなかった。顔貌は対称で、左右顎下リンパ節の腫脹、圧痛は認められなかった（写真1）。

口腔内所見：7遠心側に腫脹、圧痛などの異常所見は認められず、8は欠如、8は抜歯を受けていた（写真2）。

X線所見：右下顎枝中央部に、くるみ大の境界明瞭な多房形成のX線透過像を認めた（写真3-a, b）。

臨床検査所見：血液、化学、尿検査などにおいて異常所見は認められなかった。

処置および経過：「エナメル上皮腫の疑い」の組織診

写真1 顔貌写真

写真2 口腔内所見

岡山大学医学部口腔外科学教室（主任：西嶋克巳教授）

Department of Oral Surgery, Okayama University Medical School (Chief: Prof. Katsumi Nishijima)

受付日：昭和53年8月7日

断のもと滑面板装着後 G-O-F 全身麻酔下で、7部後方より下顎枝片側離断を行い、術後経過良好で現在再発傾向はみられない。

写真 3-a オルソパントモグラム

写真 3-b 断層写真 (2.5 cm)

写真 4 摘出物所見

写真 5 摘出物X線写真

写真 6-a 摘出物の病理組織像 (H-E 染色, $\times 100$) 写真 6-b 摘出物の病理組織像 (AB-PAS 染色, $\times 200$)

摘出物所見：下顎枝外側に骨の膨隆を認め、骨質は菲薄となり、内側中央部には直径約 5 mm の骨吸収がみられた。骨断面部は灰白色、ゼリー状であった (写真 4, 5)。

病理組織学的所見：星状または紡錘状の細長い異形成を示さない細胞が、粘液様または浮腫性の基質中に存在し、膠原線維を伴い柵状配列を呈していた (写真 6-a,

b)。

診断：以上の所見より粘液線維腫と診断した。

考 察

粘液線維腫は、おもに顎骨に発生する比較的にまれな腫瘍である。Zimmerman and Dahlin (1958)¹⁾ は Mayo

表 1 本邦における粘液線維腫の報告例 (昭.50.1~昭.52.12)

症例	発表者名	年齢	性別	発生部位	大きさ	来院までの期間	症状	処置
1	茂木敏雄, 他 ⁵⁾	49	♀	7-2) 部	6×4.5×3cm	5か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
2	茂木敏雄, 他 ⁵⁾	24	♀	7-3) 部	7×5.5×4.5cm	1年2か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
3	玉井達人, 他 ⁶⁾	49	♀	6-4) 部	拇指頭大	6か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
4	玉井達人, 他 ⁶⁾	24	♀	6-4) 部	小鶏卵大	6か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
5	新井 光, 他 ⁷⁾	38	♂	6) 部	不 明	2年	無痛性腫脹	腫瘍摘出
6	辻 和秀, 他 ⁸⁾	12	♀	5-2) 部	拇指頭大	4か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
7	伊東隆利, 他 ⁹⁾	45	♂	6-3) 部	小指頭大	10か月	有痛性腫脹	右下顎骨部分切除
8	磯野和秀, 他 ¹⁰⁾	不明	♂	上顎前歯唇側歯槽堤部	拇指頭大	不 明	腫 瘤	腫瘍摘出
9	酒井康友, 他 ¹¹⁾	28	♂	3+5) 部	不 明	不 明	32) 部膨隆	不 明
10	酒井康友, 他 ¹¹⁾	37	♂	口蓋軟組織	不 明	不 明	異和感 有茎性腫瘤	不 明
11	酒井康友, 他 ¹¹⁾	35	♀	7) 部	鶏 卵 大	不 明	下顎枝前縁の鶏卵大腫脹	不 明
12	酒井康友, 他 ¹¹⁾	38	♀	8-5) 部	不 明	不 明	8-5) 部腫脹	不 明
13	酒井康友, 他 ¹¹⁾	44	♂	16) 部	鶏 卵 大	不 明	16) 部の鶏卵大有茎性腫瘤	不 明
14	酒井康友, 他 ¹¹⁾	44	♂	7-4) 部	不 明	不 明	7-4) 部歯槽粘膜の腫脹	不 明
15	酒井康友, 他 ¹¹⁾	27	♀	6) 部	不 明	不 明	6) 部歯根根部腫脹 異和感	不 明
16	酒井康友, 他 ¹¹⁾	43	♀	7-5) 部	不 明	不 明	7-5) 部腫脹 7-5) 部の動揺	不 明
17	長谷川 明, 他 ¹²⁾	32	♂	右下顎臼歯部	不 明	不 明	不 明	腫瘍摘出
18	井原邦夫, 他 ¹³⁾	35	♀	13-7) 部	鶏 卵 大	7か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
19	西嶋克巳, 他 ⁴⁾	26	♀	4+5) 部	4×3×3cm	8か月	無痛性腫脹	腫瘍摘出
20	本 症 例	34	♀	右下顎枝部	くるみ大	1か月	右頰部の異和感	下顎枝片側離断

Clinic で50年間に26例、鈴木 (1959)²⁾は約25年間に13例、石川・秋吉 (1973)³⁾は約30年間に20例、西嶋ら (1978)⁴⁾は昭和40年より昭和50年までの11年間に、本邦における報告例を渉猟した範囲では26例のみであったと報告している。またわれわれが昭和50年1月から昭和52年12月までの3年間に、本邦における報告例を渉猟した範囲では19例みられた⁴⁻¹³⁾(表 1)。

本腫瘍の本態についての見解は種々述べられており、いまだ一定していないが、Bernier (1955)¹⁴⁾、藤岡 (1960)¹⁵⁾らは線維腫性組織が、粘液様変性に陥ったもので、この場合の粘液腫と線維腫とは同一のものとしている。鈴木²⁾は顎骨粘液腫は真の粘液組織とは考えがたく粘液様結合組織と考えるべきだとしている。また石川 (1960)¹⁶⁾は線維腫と本体的に同一のもので線維形成不能のきわめて弱い幼若型であるとし、Stout (1948)¹⁷⁾は真の腫瘍と考えている。

発生由来に関して Thoma and Goldman (1947)¹⁸⁾は多くは悪性である骨原性のものと、より一般的で良性で

ある歯原性のものとに分類しているが、二者の鑑別は非常に困難と思われる。しかし Zimmerman and Dahlin¹⁹⁾は2,276例の骨原発性腫瘍のうち顔面骨以外に発生した粘液腫はないとし、Stout¹⁷⁾は骨粘液腫10例中8例が顎骨に発生したと報告、さらに鈴木²⁾は組織所見より歯原性と考えている。また Bruce and Royer (1952)¹⁹⁾は13部に生じた例について歯原性線維腫の変性によるものとは考えにくいとし、増田ら (1971)²⁰⁾の骨原性と思われる2例の報告もみられた。

発現年齢について Zimmerman and Dahlin¹¹⁾は10歳以下、50歳以上はまれで10~29歳が67%を占めていたといい、榎山ら (1970)²¹⁾、西嶋ら⁴⁾は本邦における文献的考察においてそれぞれ平均27.2歳、33.3歳で、前者は10歳台・20歳台で54.6%、後者は20~40歳台で76.9%を占めたと報告している。われわれが渉猟した19例においては平均36.9歳であり、30歳台が7例と多くみられた。本症例は34歳であり、多いとされる年代であった。

性別頻度については、鈴木²⁾、石川・秋吉³⁾、榎山

ら²¹⁾, Barros ら (1969)²²⁾らが女性に多くみられたと報告しているように、われわれが渉猟した19例においても女性12例と多くみられ、本症例も女性であった。

発生部位別について石川・秋吉³⁾, 靱山²¹⁾は上下顎にはあまり差がなかったと述べ、Barros ら²²⁾, 伊藤ら (1973)²³⁾は下顎, 鈴木²⁾は上顎に多かったと報告している。また一般に好発部位は臼歯部である^{1, 3, 5, 15, 23-26)}といわれているが、西嶋⁴⁾は渉猟した11年間では8例が前歯部あるいは前歯部にかかっていたと報告している。われわれが渉猟した19例においては、下顎11例, 上顎8例とやや下顎に多くみられ、臼歯部のものは10例みられた。しかし本症例のように下顎枝部にみられたものは西嶋⁴⁾が渉猟した報告例で1例のみであった。

腫瘍の大きさについては、石川・秋吉³⁾は一般にくるみ大から鶏卵大に至る大きさのものがみられたと述べ、河本・森田 (1961)²⁴⁾は12×9×8.8 cm, Astaff (1957)²⁷⁾は10×10 cm という巨大な粘液線維腫を報告している。本症例では、くるみ大であった。

患者が症状を自覚してから来院するまでの期間については、Zimmerman and Dahlin¹⁾は平均1~3年, Barros ら²²⁾は1週間から15年で平均3年と報告している。本症例では、1か月と短期間に来院しているが、これはX線撮影による発見が早かったためであった。

X線所見では、石川・秋吉³⁾, 茂木⁵⁾は定型的なものでは境界明瞭な多房性の透過像を示し、内部には樹枝状の骨質を含む不透過像を示す。しかし Bruce and Royer¹⁹⁾は典型的なX線所見はなかったと述べている。本症例ではくるみ大の境界明瞭な多房形成のX線像を示し、摘出物のX線像ではやや樹枝状を示していた。また増田²⁰⁾, 靱山²¹⁾, Thoma and Goldman (1960)²⁸⁾らは fibroma, ameloblastoma, giant-cell reparative granuloma などとの鑑別診断は困難であると報告している。

処置および予後については、靱山²¹⁾, Barros²²⁾, Feingold (1957)²⁹⁾らは腫瘍組織の全摘出術を施行すれば予後は良好であったと報告している。われわれが渉猟した19例においても腫瘍摘出10例と多くみられ、本症例では骨破壊が強くみられたため下顎枝片側離断を施行し経過良好である。

結 論

われわれは、34歳女性の右下顎枝部にみられた部位的にきわめてまれと思われた粘液線維腫の1例および昭和50年1月より昭和52年12月までの本邦における粘液線維腫19例について文献的考察を行い、あわせて報告した。

稿を終わるに臨み、岡山大学医学部第2病理学教室大森正樹講師に深謝致します。なお本論文の要旨は、

第22回日本口腔外科学会総会(昭和52年10月23日、於東京)において発表した。

引用文献

- 1) Zimmerman, D.C. and Dahlin, D.C.: Myxomatous tumors of the jaws. OS OM OP 11: 1069 1958.
- 2) 鈴木 進: 顎骨内部に発生する線維性腫瘍についての病理学的研究. 口病誌 26: 298 1959.
- 3) 石川梧朗・秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 永末書店, 京都, 1973, 941頁.
- 4) 西嶋克巳, 他: 下顎前歯部にみられた粘液線維腫の1例. 日口外誌 24: 94 1978.
- 5) 茂木敏雄, 他: 上顎骨粘液線維腫の2例. 日口外誌 21: 612 1975.
- 6) 玉井達人, 他: 上顎骨粘液線維腫の2例(抄). 日口外誌 21: 371 1975.
- 7) 新井 光, 他: 下顎骨に発生した Myxo-Fibroma の1例(抄). 日口外誌 21: 856 1975.
- 8) 辻 和秀, 他: 下顎骨に発生した Myxofibroma の1例(抄). 日口外誌 21: 857 1975.
- 9) 伊東隆利, 他: 下顎骨に発生した軟骨粘液腫の1例(抄). 口科誌 24: 257 1975.
- 10) 磯野和秀, 他: 先天性粘液線維腫の一例(抄). 口科誌 24: 257 1975.
- 11) 酒井康友, 他: 口腔に発生した粘液線維腫の8例. 歯科学報 76: 19 1976.
- 12) 長谷川 明, 他: 臨床的に Epulis を疑い、病理組織学的に Odontogenic myxofibroma と考えられる1例(抄). 口科誌 25: 186 1976.
- 13) 井原邦夫, 他: 粘液線維腫の症例(抄). 日口外誌 23: 986 1977.
- 14) Bernier, J.L.: The management of oral disease. C.V. Mosby Co, St Louis, 1955, p 678.
- 15) 藤岡幸雄: 中心性顎骨線維腫の種々相について. 口科誌 9: 323 1960.
- 16) 石川梧朗: 歯原腫瘍について、とくに病理学的方面から(その2). 口病誌 27: 307 1960.
- 17) Stout, A.P.: Myxoma, the tumor of primitive mesenchyme. Ann Surg 127: 706 1948.
- 18) Thoma, K.H. and Goldman, H.M.: Central myxoma of the mandible. Oral Surg 31: 465 1947.
- 19) Bruce, K.W. and Royer, R.Q.: Central fibromyxoma of the maxilla. OS OM OP 5: 1277 1952.
- 20) 増田正樹, 他: 中心性粘液線維腫の2例. 日口外誌 17: 432 1971.
- 21) 靱山正徳, 他: 顎骨内粘液腫の症例および本邦におけるその文献的考察. 口科誌 19: 957 1970.
- 22) Barros, R.E., et al.: Myxoma of the jaws. OS OM OP 27: 225 1969.

- 23) 伊藤輝夫, 他: 下顎に発生した odontogenic myxofibroma とその文献的考察, 日口外誌 19: 365 1973.
- 24) 河本健行・森田知生: 下顎に発生した巨大ないわゆる粘液線維腫の1例, 口外誌 7: 11 1961.
- 25) 渡辺邦一, 他: 下顎に発生したいわゆる粘液線維腫の1例, 口科誌 20: 795 1971.
- 26) 岡山秀昭, 他: 電顕的に観察した粘液線維腫の1例, 日口外誌 19: 491 1973.
- 27) Astaff, A.: Myxofibroma. OS OM OP 6: 247 1957.
- 28) Thoma, K.H. and Goldman, H.N.: Oral Pathology. ed 5, Mosby Co, St Louis, 1960, p 1367.
- 29) Feingold, M.: Myxofibroma of the maxilla. OS OM OP 9: 826 1957.
-